

H29 年度 第 2 回埼玉県言語聴覚士会西部支部研修会 報告

平成 29 年 11 月 17 日、第 2 回西部支部研修会がウエスタ川越にて開催されました。今回の研修会は、「失語症臨床 回復に応じたリハビリテーションの組み立て方」と題し、国立障害者リハビリテーションセンター病院の北條具仁先生をお招きしてのご講演と、日本高次脳機能障害学会の予演会(2 演題)を行いました。当日は 16 施設、45 名と非常に多くの参加者にご来場いただきました。

北條先生のご講演では、失語症の臨床を考えるにあたり、あくまで患者様の反応を緻密に分析することが重要であり、変化を敏感に察知して、状態に応じて訓練のステップをあげていくことが、ST に求められる技量であることを改めて考えさせられました。非常に臨床的な内容を、先生のユーモアを交えてお話されて、あっという間の学びの時間となりました。

講演後の予演会では、リハビリテーション天草病院の唐澤健太氏から「呼称にて特徴的な反応を示した失語症例に関する視覚認知機能の分析」、川越リハビリテーション病院の石川芽衣氏から「拮抗失行から道具の強迫的使用に移行したと思われる症例への環境設定アプローチ」という題目のもと、ディスカッションが行われました。いずれの演題も、症状を細かく分析することを起点とした臨床研究であり、自らの臨床を振り返るまたとない機会となりました。

次回は2月を予定しております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。



北條先生 ご講演

西部支部理事 大森智裕
部員 米谷 寛

参加報告 圏央所沢病院 菊川枝里子さん

「失語症の回復に応じたリハビリテーションの組み立てについて」ご講演いただきました。講演の中で、「言語の階層性」と「刺激素材・ヒント方法の階層性」という2つの「階層性」が印象に残りました。セラピスト自身が、現在どの階層で介入しているかということに明確な理由を持っている必要があると痛感しました。今回の講義は、図や表を用いた説明や、実際の症例の訓練経過の紹介もあり、初学者でもイメージしやすく、今まで煩雑であった頭の中を整理することができました。今後の臨床において、訓練立案に迷った際はここに立ち返ってこようと思えるような内容でした。

日本高次脳機能障害学会の予演 2 演題については、どちらの発表も着眼点が興味深いものでした。症例の障害構造の分析において、観察眼・知識量とともに、得た知識の有機的な繋がりをいかに発見できるかが大事であると感じました。

この日学んだことを臨床に活かし、日々研鑽を積んでいきたいです。